

高校地学における「太陽地球環境」の現状と将来

Introduction of Sun-Earth environment science to "Chigaku" at high school

中井 仁[1]

Hitoshi Nakai[1]

[1] 茨木高校

[1] Ibaraki High School

最近の通信技術の発展は、その基礎の部分で太陽地球環境（SEE）に関する科学研究の成果に拠っている。同領域は、今後さらに広範囲にかつより緊密に社会生活と関わってくることが予想される。本研究では、現在の高校「地学」におけるSEE関連の扱いを分析した。取り扱いの分量、具体的にはページ数、を他の地質、気象、天文といった領域と比較すると、SEE分野は極端に少ないことが分かる。高校地学が学習の目的とする範囲を、「生活環境を外に向かって延長した領域」と規定すると、SEEが今後の重要な学習項目の一つであることは疑い得ない。発表では導入の必要性を述べるとともに、その方法についての試案を示す。

最近の通信技術の発展は、その基礎の部分で太陽地球環境（SEE）に関する科学研究の成果に拠っている。同領域は、今後さらに広範囲にかつより緊密に社会生活と関わってくることが予想される。本研究では、現在の高校「地学」におけるSEE関連の扱いを分析する。地球電磁気・惑星圏学会（SGEPSS）のこの問題についての見解は、学会ホームページの「以上からわかる様に、高校の教科書は多様だが、ほとんどの教科書でSGEPSSの扱う固体地球電磁気、超高層大気、電磁圏の各テーマについてかなりの記述がされていることが明らかである。」に見ることができる。しかし、この見方は、項目の数だけに依った一面的な見方である。取り扱いの分量、具体的にはページ数、を他の地質、気象、天文といった領域と比較すると、SEE分野は極端に少ない。その理由の一つとしては、SEE分野がこの40年間に大発展を遂げた新しい領域だという点があげられる。高校地学が学習の目的とする範囲を、「生活環境を外に向かって延長した領域」と規定すると、SEEが今後の重要な学習項目の一つであることは疑い得ない。発表では導入の必要性を述べるとともに、その方法についての試案を示す。